

# 南インド半乾燥地帯における農村貧困層にとっての

## 貧困削減手段としてのヤギ飼育の意義の研究

—タミルナドゥ州マドゥライ近郊農村での定点観察から—

平成19年編入  
派遣先国：インド  
佐藤 慶子

キーワード：ヤギ，溜池灌漑農村，世帯調査，シングルカースト村，貧困削減

### 対象とする問題の概要

インド南部に位置するタミルナドゥ州では、都市部の発展に呼応するように、約3万9千の灌漑用溜池を中心とした農村部において、揚水機やトラクターの普及等に見られる農業の近代化が進んでいる。また同上地域の農村では、ヤギの所有が広範囲に見られ、ヤギの飼育は農村の社会経済構造と密接に関連していることが予想される。

溜池や共有地の共同管理体制が弛緩し、貧農の生活環境がより厳しさを増している中、増加するヤギ飼育が農民、特に貧困層の家計経済にもたらす意味を明らかにすることが本研究の課題である。

### 研究方法

ヤギは、牛に比べて手間や飼料の世話があまり要らず、また乾燥気候に強く繁殖も早くて多産である。また肉や乳だけではなく、皮はテントやグローブに、毛は絨毯に、糞は肥料になど、経済的にも幅広く有用であり、ヤギを飼うことのできる小農にとっては手堅い収入源となっている。藤田ら<sup>1)</sup>によると、調査地域内のV村では土地所有農民と土地なし農民におけるヤギ所有の世帯割合はそれぞれ54.8%、72.8%であり、土地なし世帯のヤギ飼育への依存度が高いことがわかっている。

本研究では、ヤギ飼育が盛んな村（以下Si村）を選定して定点観察を行い、村のリソースや社会組織・経済活動などを把握するとともに、調査票を用いた世帯調査をサンプル世帯に対して行って、質的・量的データを獲得した。

### フィールドワークから得られた知見について

Si村は、V村や他のいくつかの集落とあわせ、約600エーカーの農地を灌漑する溜池に接しており、現在、140世帯が居住するシングルカースト村<sup>2)</sup>である。Si村には、世襲制の4名の長老（もめごとの調停を主たる仕事とする）を中心とした自治組織が存在し、公開競争入札により毎年選任される徴税担当者<sup>3)</sup>が、村内での農産・畜産物取引に対して課税を行って自治組織の財源としている。自治組織は、村祭りを主催するほか、村人へ有利子での資金融資も行っており、村人間の互助的役割を果たしている。

- 1) 藤田幸一氏、佐藤隆宏氏による溜池修繕プロジェクトの事後評価調査結果(2007年6月)による。
- 2) Reddiyar カーストが全体の95%を占める。他に、Asari, Dorbi 世帯が居住する。
- 3) Magemai と呼ばれ、産物（綿花、稗、豆、木材、果樹、堆肥、畜肉、その他）毎に選任される。

世帯調査の結果、Si村のヤギ飼育世帯の割合は86%であり<sup>4)</sup>、飼育理由のほとんどが「追加収入を得るため」<sup>5)</sup>だが、一方でヤギ売却益は、「農業出費」、「子供の教育費／結婚費用」、「病気治療費」、「家建築費」、そして年に数回ある祭りへの「供犠」（文字通りのスケープゴート）などに利用され、村人にとって「生きた貯蓄」としての重要性が高いことが明らかになった。

近隣のV村やS村と比較すると、Si村は農産物の収量が低く、特に灌漑用水を必要とする米作に対してあまり力を入れていない。農民は、多量の水を必要としない豆や粟・稗作や、家畜飼育などの非耕種農業により力を注いでいる。それを裏付けるかのように、灌漑用農地を隣村の農民に貸付けつつ<sup>6)</sup>、子供の教育や就職を契機にして離村する世帯も多数存在しているのである。

### 今後の展開・反省点

こうして、農民にとってのヤギ飼育の意義は明らかになった。しかし本調査村はシングルカースト村であり、他に、村人の同質性をもたらす親族ネットワークや自治組織による相互扶助の存在も、現金化しやすいヤギ所有による貧困削減の効果を補強していると推定できる。今後は、近隣の土地なし世帯も多く含まれるマルチカースト村（V村）で、ヤギ飼育による貧困削減の実態や自治組織との関連を調査し、Si村との比較考察を行ってゆきたい。



写真1 ヤギの放牧に出掛ける様子



写真2 収穫物の買取（トラクター利用）



写真3 世帯を対象とした聞き取り調査の様子

- 4) 飼えない理由として、老夫婦世帯や夫婦共に工場等のフルタイム勤務をしている等。
- 5) 他に、「農業用肥料（堆肥）を得るため」などがある。
- 6) Otti や Saibogam と呼ばれるシステムである。